
陰陽峠

六十一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽峠

【Nコード】

N4598D

【作者名】

六十一

【あらすじ】

今尚“神隠し”の伝承の息衝く山『陰陽峠』論文作成のために実地調査に訪れた二人の学生が辿る運命とは。 陰陽人は、人の声に籠もりたる心の臓の音に、居所を知るといへば……………

第1話

陰陽峠には、恐ろしき呼ぶ声、あり。

『峠を越ゆる二人の駄賃、暗き山中にて「どこやー」といふ声を聞きたり。

呼ばはる者は見へざれど、世の常に在らざる怖き声音に、色を失ひて、一人、疾く逃げ去りたるが、いま一人の駄賃、何処とも知れぬ声の主に、戯れに「ここやー」と応へたりといへり。

陰陽峠には、陰陽人が住まうとて、峠にありて呼び声に応へるは禁忌なり。

応へたる者、皆全て、何れかへ、さらはれてしまふなりといふ。

其の駄賃もまた、峠に入りたるまま、帰り来らず。

陰陽人は、人の声に籠もりたる心の臓の音に、居所を知るといへば……………」

逢沢祐輔 著 『水無瀬万見聞』 より抜粋。

振り返って見ても、今しがた通ってきた、枯れ葉の敷きつめられた山道に、大蛇がのたくったような、自らの踏み跡が続いているだけだった。

連れの友人、奥寺陽司の姿は、どこにもない。

「ちよつと覗いていく」と、山道の枝道に奥寺が消えてから、随分時間が経っている。

冬の枯れた木々の間から覗く空は、もう、薄暗くなり始めていた。夕闇が近づいているのだ。

天を仰ぎ見たまま、僕、境木秀明は深く溜息を吐いた。

吐息の白い薄靄が、尾を引いて吸い込まれるように山中に消えて

いく。

「すぐに追いつくから、お前は先に行ってるよ」という奥寺の言葉通りにしてしまったことを、僕は後悔し始めていた。

ここは「陰陽峠」、古くからの言い伝えに残る、神隠しの山だ。

地元の村の人間は、未だにこの山道を利用することはないという。

「昔っから村に住むモンは、絶対に通りやあせんよ。インヤンにさらわれる、言うでな」とは、先刻話を聞いた、麓に住む古老の言だ。

僕と奥寺は、同じ地方私立大学「深青学園大学」に通う民族学専攻の学生である。

目前に最終学年を控え、卒業論文に“地元の民族伝承”を題材として選んだ僕は、冬休みを利用して、共同の実地調査に訪れていた。

僕達の住む町「水無瀬市」^{みなせ}は、東の境を太平洋に面し、三方を、「来明山」^{らいめい}「今須山」^{います}「星降岳」^{ほしふり}という、水無瀬三山と呼ばれる山々に囲まれた盆地にある、人口3万人程の地方都市だ。

そしてその街の北西に聳える、水無瀬三山の内一つで最高峰の今須山を、丸ごと占拠する形で、中高大院4学部を持ち、学生、教師、学園関係者を含め、総数約1万名を数える巨大な私学校「深青学園」の校舎及び関係施設が山中に軒を並べている。

市内総人口の約30%を占める学生達に埋め尽くされた、学園都市こそが、「水無瀬市」の今ある、本当の姿だといつていい。

年々開発の進む市内中心部とは対照的に、北東の海岸に面した一部地域は、未だに旧態然とした暮らしをしている人々が生活しており、そこは学生たちの間では、単純に「村」と呼ばれていた。

その「水無瀬村」には、古えの時代より伝わる伝承が、今尚、息衝いている。

村の旧家に祭られる「オクスリサマ」と呼ばれる神像や、人の姿

をとって現れるという土地神「ノウデンサン」の話。

注連縄そのものを「オンヘビサマ」として古木に祭ることや、猫を神の使いとして神格化し「オツキサマ」と呼ぶ風習。

どれも、とても興味深い。

17世紀終わりの頃から、18世紀初頭にかけての時期、測量のために訪れた幕府天文方 旧朝廷の陰陽寮の、ともいわれている人間がこの地に留まり、拓いたのが「水無瀬村」の始まりと言われているが、その頃からの伝承が、失われずに語り継がれている「村」は、僕のような民族学に興味を持つものからすれば、垂涎の場所なのだ。

そんな多くの研究対象から、僕達を選んだのは、18世紀中期から関連する話の多くなる「陰陽人」の伝承だった。

その頃の水無瀬村の主要人物として、長崎の朱印船貿易で、商人「末次平蔵」のもとで、船乗りとして活躍していた「小楫の蔵男、上彦」という兄弟がいた。

彼らが帰郷した1760年頃から、水無瀬村は日本の南北を結ぶ太平洋岸の中継港として、また、取れた魚を輸出する貿易港として発展していくことになる。

鎖国中「田沼意次」との密約により結託した兄弟は、水無瀬の港を、禁制品取引と、横領金の金庫として運用し、相当の利益を得たようだ。

人間としては余り褒められたものではないが、この二人、特に小楫改め「深見 上彦」とは、切っても切れない関係が「深青学園」にはあった。

深見の死後、遺産は故人の意思により、兄である「小楫の蔵男」と「遠野 蔵人 国定（とおの くらうど くにさだ）」という人物を管理人として、後の「深青学園」の母体である「深青塾」の設立に使われたのだ。

その、言わば学園の“創始者”とも言える人間が活躍した同時期から目撃譚の増える「陰陽人」の伝承は、なにかこの学園自体との、

因縁めいたものを感じさせ、僕を強烈に引き付けた。

今までの研究発表から「陰陽人」は、おそらく船に乗って水無瀬村を訪れ、なんらかの理由で「陰陽峠」に居ついた“西洋人”ではないか、という説が有力である。

「陰陽峠」に現れる陰陽人には、概して伝えられる特徴がある。まずは大きな体躯。

これが一番の特徴で、伝承に出てくる陰陽人の多くは、通常の間。この場合、当時の村人のことだ。よりも、身長が随分と大きい。

中には例外的に、村人と同じ位の身長のもも登場するが、大抵は頭一つ以上は違うようだ。

今でこそ、体格的に西洋人に比べ、見劣りすることも少なくなってきたが、当時の日本においては、西洋人の体躯は、まるで別の生き物であるかのように、大きく見えたことだろう。

次に髪や目の色、顔の作りなど。

これは、話によってまちまちではあるが、幾つかの話には金髪、碧眼と思われる陰陽人が出てくる。

彫りの深い、西洋人的な風貌を思わせる者が「陰陽人」には多い。もちろん東洋人的風貌を持つ「陰陽人」も存在するが、それらは「陰陽峠」に入り、一度神隠しに遭った後、彼ら「陰陽人」の側に与した形。例えば陰陽人のしもべ、や、妻、という立場であるで現れる、“元水無瀬村村民”の場合が殆どである。

その場合面白いのは、“元村人”であつたところの「陰陽人」も、大きな体を持つ人間として変化させられ、描写されていることが多いことだ。

“神隠し”にあつて再び現れると、急に背が伸びているというのは、なんだか変な話だが、おそらくこれは、一度“神隠し”に遭い、戻ってきたということを、視覚的に文章で表現しようとしたものなのではないかと思われる。

つまり“神隠し”に遭つた人間は、もう村人側の人間ではなく、

あちら側である「陰陽人」の世界を体験した人間として、明確に区別されていた、ということではないだろうか。

このあたりは『黄泉辺喰い』をしてしまった、日本の創造神「イザナミ」を連想させる。

イザナミは一度死に、黄泉の食べ物を食べたことで、夫である「イザナギ」が冥府に迎えに来た時には、現世に帰ることが容易では無くなっていた。

これと同じように、一度神隠しにあったものは、正常な状態で村に復帰することができないということを、伝承は伝えたかったのだろう。

どれだけ「陰陽峠」や、そこに住む「陰陽人」が、当時の村人達から恐れられ、忌避されていたかが窺える。

このように言い伝えられる幾つかの伝承を総合して見て見ると、山に立ち入るものをさうという「陰陽人」には、西洋人のそれと思わせる特徴が、多数見受けられるのだ。

実のところ僕も“「陰陽人」”「西洋人」説”で決まりではないかと思っているのだが、それはそれとして、もし「陰陽人」の正体が渡海してきた西洋人であるならば、その頃の村人と、彼らの関わり方はどんなものだったのだろうか？

なぜ彼ら「陰陽人」は、山の中で暮らさなければならなかったのか？

僕の興味の大半は、そこにあった。

村人は、かれら「陰陽人」を恐怖していた。それは、残された数々の文献、口伝から窺い知ることができる。

では、間違っても平和的とは言えない、両者の関係の背後にあったものは、一体なんなのだろう？

そうして僕の卒業論文は“18世紀「水無瀬村」における「陰陽人」伝承”というテーマに定まった。

同じ民族学専攻で気の合う友人である奥寺が、その研究テーマに共感し、共同調査となったわけなのだが……

今須山の麓にある「深青学園前駅」から「学園環状線」という私鉄鈍行電車で、最寄の「主ノ浜駅」^{すのはま}で下車すると、その先はもう「村」である。

広がる長閑な田園風景。

道標のように間隔を空けて立つ木造平屋建ての家屋は、どれも古いながらも確りとしていて、長年の風雨に耐え続けたその姿は、古臭さよりも、なにか一種の力強さのようなものを感じさせる。

水無瀬を南北に分断する河川「水無瀬川」の支流である「揺籠女川」^{ゆりごめ}の畔に建つ水車小屋、遠く北に聳える「来明山」の中腹にポツンと小さく、篝火のように赤く浮かぶ「外具神社」^{そとぐ}の大鳥居。東の「主ノ浜」^{すのはま}の浜辺を北上すれば、「竹縷々（たけるる）」という小さな砂丘に出る。

村には、悠久の昔から変わらぬ今が、続いている。

僕らが生まれる遙か昔からなにも変わらぬ風景の中を、ただ、進んだ。

僕達の目的地は、駅から北西に、左手に「若月峠」^{わかつき}を望みながら進み、徒歩で一、二時間程のところにあつた。

晩秋の風は冷たく、峠から吹き降ろす風が体を舐る度に、ぶるりと小さく体が震える。

それでも空は晴れ渡り、天気は良好だ。澄んだ空気、穏やかな霧囲気。

日の当たる場所は暖かく、絶好の取材日和だった。

ぼんやりと辺りの景色を眺めながら歩く。

山の緑はすでに紅葉へと移り変わっており、自然の原色の、あまりの鮮やかさにはっとなる。

目を焼くような作られた色彩の中で暮らす僕にとって、それらは新鮮な驚きに満ちていた。

無論この村を訪れたのは、初めての経験ではない。

最近では今年の夏にも、散策と研究を兼ねて来てはいたのだ。

しかし村は、季節ごとに全く違った姿を見せた。

熱心な歴史考古学や、民族、宗教学の学生、教師の中には、村の魅力にとっぴりと心酔し、最早村人のような生活を送っているものもいるそうだ。

それも分かる気がした。

村の時間は、常にゆっくりと流れている。悠久の昔から続く、生命のテンポで。

こうして歩いていると、あまりの長閑さに、あくせくとした都市部の暮らしが、なにか遠い夢のような錯覚を覚える。

いや、この「村」こそが、薄れ、消えてゆく、夢の姿なのではないかとも思われた。

「陰陽峠」の麓に住む、最も「陰陽人」の伝承に詳しいという老人から、神隠しの伝承やら、いつ誰某が実際に神隠しにあったやらと、いくつかの話を聞き終えたのは昼前の事だった。

現地の人間から、実際に伝わる生の話を聞く。

本来この場所を訪れた目的はそれだけで、その目的をあつさりと果たしてしまった僕は、時間を持て余してしまっていた。

老人の話はどれも聞いたことのあるような話ばかりで、「陰陽人」の真実に近づく新たな発見は無く、僕は内心がっかりとしていた。そこへ奥寺が、実際に峠を通ってみよう、と言い出したのである。もともとの予定にはなかったが、地図での距離は15kmそこそこ短い。

日暮れ前には十分に抜けられる、と僕は踏んだ。

つい今しがた神隠しの話を聞いたばかりで、あまり良い気持ちはしなかったが、「実際に目で確かめなければ論文にリアリティはない、せつかく村に実地調査に来たというのに手ぶらで帰るのか」と主張する奥寺に説き伏せられる形で、僕はしぶしぶそれを承諾した。その時は、確かにそれも一理ある、と思えたのだ。

しかし 足首の上まで埋まる程もった落ち葉を辺りに蹴り散らし、苦々しい思いをぶつけながら、峠を進む。

一枚一枚では無いにも等しいと思える重さの葉が、こんなにも執拗に足元に絡んで、歩みを鈍らせるものだとは知らなかった。

それでも、峠の中頃を過ぎる頃までは、順調といってよかったのだ。

奥寺が、あんな気まぐれさえ起こさなければ……

峠に入っただばかりの頃は、足場が悪いのに加え、土地勘が無い場所での行軍に、いささか緊張気味だった。

しかし、それにも徐々に慣れ、時折開けた場所から、向こう側の麓が窺えるようになると、僕達の気分は一気に軽くなった。

そんな時、奥寺がふと見つけた枝道に入っていきたいと言い出したのだ。

何故かと問うと奥寺は「人影が見えたような気がして」とおどけるように言った。

また奥寺の悪ふざけが始まったと、さっさと先に進むよう促したのだが、奥寺は枝道に入っていくのだと、頑として聞かない。

只でさえ初めての場所、しかもそれ程の標高はないとはいえ、立派な山中だ。

いかに麓が近いからといって、下手な行動は控えた方がいいのではないかと諭したのだが、今度は「お前はあの言い伝えが怖いのだろっ？」などと、にやけ顔で言われたものだから、少しかちんときた。

奥寺は、いつもは気さくでいい奴なのだが、すぐに人をからかうところがある。

じゃあ好きにしろとばかりに、呆れ、少し腹を立ててもいた僕は、奥寺とそこで別れたのだ。

すぐに追いつくと言っていた奥寺だったが、それから一向に姿を現さなかった。

時間を確認すると、別れてからもう、ゆづに二時間は経っている。

奥寺は興味を覚えた物にいちいち「引つかかる」という、研究者としては良いが、時に厄介な性癖をもっているから、大方道端に埋もれた道祖神でも見つけて、時間を忘れてそれをこねくり回しているとか、そんなところだろうと思う。

しかし、奥寺は地図もコンパスも持っていないはずだ。

それらは僕が念のためと用意した1セットのみで、今、僕の手元にある。

暗くなれば見通しも悪くなり、更に迷い易くなるだろう。

いくらほとんど一本道の峠とはいえ、地図無しでは、つらいのではないだろうか？

足元にはつきりとした通り道が残っているから、僕に追いつくことは容易だろうが、それも視界が通っているからこそだ。

慣れない山道に足をとられ、怪我をしないと限らない。

自分でも、大の男に対して、気のまわし過ぎかとは思う。

だが、いわゆる心配性のきらいのある僕は、奥寺のことを案じると、どうしても歩みが鈍った。

自然、道行きは、どんどん遅れていくことになってしまったのだ。麓に近づき開けかけていた山道は、再び高い木々の生い茂る中にうねうねと曲がりくねりながら伸び入り、辺りは一層暗さを増した。もうすでに、夜の空気の匂いがしてきている。

それにつれ、木々のざわめきや、野鳥の鳴き声が、どこか空恐ろしいものに思えてくる。

つい先程まであった、先に進んでいるという感覚が、見通しの利かない視界に、実感を伴わなくなっていた。

天蓋のように頭上に覆いかぶさる、背の高い木々が創り出す闇の密度は、どんどんと濃くなり、僕の不安をかきたてていく。

不気味な雰囲気。

一度そう考えてしまうと、頭の中に、ありもしない疑念が、次々に浮かび上がってくる。

自分は峠を越えるどころか、どんどん山の奥へと分け入ってしまった

っているのではないか。

実は、奥寺が入っていった枝道こそが本道で、間違った脇道に逸れてしまったのは、自分の方なのではないか。

そう考えると少しぞつとした。

立ち止まり、左胸の辺りをトントンと軽く指先で叩く。

最近癖になってきた“オマジナイ”だ。

こうすると、不思議と気持ちが楽になってくる。

不安な気持ちを落ち着かせるため、地図とコンパスで、麓の方角を確認することにした。

地図を検分する間、山頂から吹き降ろす風が枯れ葉を巻き上げる度、それらが擦れあつてガサガサと音を立てるのが、やけに気になった。

現在地を確認するのは、慎重を期す作業だ。

雑音雑念を、極力、頭から締め出す。

大丈夫、この道で間違いないはずだ。

不安をかき消すように一度頭を振って、僕は前に向き直った。

第2話

余計な事を考えないように、ただただ、前後に足を動かすことだけに集中する。

一人黙々と歩く山道は、驚く程静かだった。

水無瀬市の中心部からは離れているが、峠を超えた麓から少し歩けば、学園環状線の「女子寮前駅」がある。

ここからは見えないが、すぐ下には、山を迂回するように太い公道が走っているはずだ。

なのに山道の両脇に生い茂る密度の高い木々が、それらの気配を遮断し、この峠を一つの別世界のように感じさせている。

誰かの囁き声が聞こえたような気がしてそちらを振り向いた、が何も無い。

きっと枯れ葉の擦れあう音を聞き違えたのだろう。

単調な足音意外に物音が少ない分、神経が過敏になっているのだ。先程は、地面に這い蹲って、こちらを睨みつけている人間がいるとぎよつとなつたが、それもなんのことはない、薄暗い光が、ちようどそう見える陰影をその倒木に落としていただけだった。

昼前に老人に聞いたばかりの話のあれこれが、頭の中にこびりついていて、それが目に映るありふれた峠の光景を、神隠しの峠の得体の知れない雰囲気を作り変えているのに違いない。

奥寺は、どうしただろう。

奥寺の軽口が、なぜだか無性に聞きたくなった。

こんなに暗くなってきて、ちゃんと追いかけてこられるのだろうか。

いつの間にか早足になっていた足を止め、その姿が見えないかと後ろを振り向く。

その暗さに、まず、驚いた。

薄暗いなどと言うものでは、最早なくなっていた。

山道は、数m先から完全に暗闇に沈んでしまっている。

僕は余りの急激な変化に、しばし呆気にとられてしまった。通ってきた足跡が、闇から生まれた触手のように、足元に伸びている。

そこに奥寺の姿がないことに落胆するのもそこに、前に向き直り、一步を踏み出そうとして、僕は立ち尽くした。

こちらの道も、見えなくなっている。

つい今しがた振り向くまでは、確かにここに、ちゃんと道があったのだ、見えていたのだ。

それが今は、まるで進入を拒むかのような闇の壁が、眼前に立ちはだかっている。

そんなハズは、ない。

いくら冬の夕方が短いからといって、これはない。

もう一度後ろを振り向くが、同じように道はない。

慌てて前に向き直る、道は見えなくなっている。

……おかしい、不自然過ぎる。

こんなことは、容易に信じられる話ではない。

突然、道が見えなくなってしまうなんて。

なんども前後を確認してみる、が、いくら見ても、先程までのように道の先を伺うことは、出来なくなっていた。

気がつくと僕は、暗闇に浮かぶ光の小島の上に立っていた。

時間が経てば、潮が満ち、確実に沈んでしまう小島だ。

何故だ、何故こんなにも日の落ちるのが早いのだ。

時計を見ると午後5時、確かに冬なら十分に日の落ちる時間だが、先程時間を確認した時は3時過ぎだったはずだ。

いつのまにそんなに時間が経っていたのだろうか。

同じ景色ばかりが続く山道に、時間の感覚までが狂い始めているのか。

兎に角、先に進まなければならない。

唐突な状況の変化に急ぎ立てられるように数歩足を進めて、はた

と立ち止まる。

待てよ、今自分が向いているのは“前”なのか“後ろ”なのか。

自分でも何度振り返ったのか覚えていなかった。

完全に浮き足だっている自分に愕然とする。

いままでと同じ山の中なのに、日の光が弱まることで、全く別の場所に自分が放り込まれた気になった。

落ち着け、落ち着けと、心の中で繰り返し、トントんと左胸を叩く。

念のため、地図とコンパスで、再び方角を確認しつつ歩き出す。

大丈夫、間違いない。

時間だつてまだ5時だ、夕方じゃないか、十分に時間はある。

そう自分に言い聞かせたが、完全に日が暮れてしまうまで、左程時間が残されていないことは明白だった。

ここで道を間違えようものなら、今日の夜は、神隠しの伝承の残る山の中で野宿するはめになる。

いくらなんでも、それは御免だ。

白く煙る吐息で曇ったコンパスを、汗の滲んだ掌で擦る。

只でさえ暗くて見づらいのに……コンパスの表面を何度も擦るうち、かじかんだ手の平から、それはポトリと零れ落ちた。

あっと思う間もなく、コンパスは厚く積もった枯れ葉の間に隠れ、見えなくなってしまった。

冗談じゃないと、急いでしゃがみ込んで、落ちた辺りの枯れ葉を掻き分け、必死にコンパスを探した。

こんな山の中で方角まで判らなくなってしまうなんて、本当に冗談じゃない。

枯れ葉の山に鼻先を突っ込むようにして探し続けると、ようやくそれは見つかった。

安堵のため息を漏らし、二度と決して落とすまいときつく握り締めた手に、鋭い痛みが走る。

どうやら探している最中に、木の枝が何かで切ってしまったらしい。

ぼとりぼとりと落ちる血の雫が、暗がりにはやけに赤い。

コンパスについた血糊を丁寧に上着の袖で拭いて方角を確認しようとして、僕は、ああ、と目を閉じた。

あるうことがコンパスの針は、エンジンのかかり始めた飛行機のプロペラのように、ゆっくりゆっくりと回転を始めていた。

手に怪我までして探し出したというのに……

よく山中では地磁気でコンパスが狂うなどというが、実際に経験するのは始めてのことだった。

なにもこんなタイミングで……

衝動に任せて、役立たずのガラクタと化したコンパスを投げ捨てようと手を振り上げたが、寸でのところで思いとどまる。

僕は、それを捨てられなかった。

自分の女々しさに胸が突き上げられて、少し泣きなくなった。

山は異界だと、誰かが言った。

今、それを実感として感じる。

人間に幸をもたらす山は、ある一点を境に突然その様相を変化させる。

人ならざる者の潜む、異界へと。

例えば 夜の訪れとともに。

すぎるように天を仰いだ。

葉の落ちた木々が重なり合う自然の格子戸が、陽光の残り火に青黒く染められた空を、水面のように揺らめかせていた。

本当に水底に沈められたような閉塞感に圧倒され、焦燥がじりじりと内側から全身を焼く。

もう方角を確認することはできない。

今は自分が向いている方向が麓へ続く道だと信じて、前に進むことしかできなくなった。

コンパスを探すのに梃子摺っているうちに、道は殆んど見えなく

なつてしまっていた。

細心の注意を払って前進するしかない。

今まで歩いた分で、距離は大分稼いでいるはずだ。

方角さえ間違えなければ全く周りが見えなくなる前に、ここを出ることができるかもしれない。

ふと思った。

奥寺はどうする？

軽く手を上げて枝道に入っていく奥寺の姿が、脳裏に浮かぶ。

あいつはこの山の中、地図もコンパスも持たずに、どうしようもなくなっているに違いない。

不安でしかたがないはずだ。

そいつを置いていくのか？

しかし、と思い直す。

そもそも今こんな状況になつてしまっているのは、その奥寺のせいではないのか。

一緒に峠を進んでいれば、今頃はもうとくに抜けているはずだ。自分は奥寺が別行動をとることに反対したのだ。

取り残されることになつても、それは奥寺の自業自得ではないか。それに迎えにこうとするのは現実的ではないように思える。

仮にあの分かれ道まで戻ることができたとしても、この暗さだ、確実に見つけられる保証はどこにもない。

更に運良く見つけられたとして、その先はどうするのだ？

コンパスは役に立たない、灯りがなくて地図も見えないではどうしようもない。

結局二人で野宿することになるのがオチだ。

最も無難な選択は、このまま動かず夜を明かすことだが、それはあくまで最後の手段にしたい。

とすれば、何とか一人で麓まで降り、救助を求めることぐらいしか無いではないか。

だが、奥寺はもうすぐそこまで来ているのかもしれない。

ほんの少し後戻りするだけで、案外簡単に出会ったことができるのかも……

仮定の連続に、僕は身動きが取れなくなってしまっていた。どの選択も自分には選べそうも無い。

自分の決断力の無さに打ちのめされ、力なく立ち尽くした。その時だった。

ぶるるるるる！

静まり返った山中に場違いともいえる電子音を聞いた時、安堵するよりも先に、

僕は自分の馬鹿さ加減に心底あきれ果て、全身から力が抜けていくのを感じて、その場に崩れるように座り込んだ。

そつだ！ 電話！

なぜそんな事に気づかなかったのか！

気恥ずかしさに思わず自分自身への言い訳を考えながらも、背負った鞆から携帯電話を取り出す。

日頃は煩わしくて鬱陶しいだけだったそれが、こんなにも頼もしく思えたことはなかった。

鞆の中にはレポートのための筆記用具だけで、使えるものなど何も入っていないと、調べてみていなかった自分の愚かさを呪った。雰囲気飲まれて、最初に思い浮かべるべきものの存在を、僕はすっかり忘れ去ってしまっていたのだ。

携帯電話は暗闇に馴れた目を焼くほどの力強さで、液晶画面を明滅させていた。

辺りが緑の蛍光色で満たされる。

これがあれば、地図を見るときの灯りにも使えそうだ。逸る気持ちを抑えながら、着信番号を確認した。

着信は“奥寺”となっている。

あいつめ！

胸の内に喜びとも怒りともつかない感情がこみ上げた。何を言ってるのか、心配させるなと怒鳴りつけてやるのか。

それよりも自分が困り果てていたこと、電話の存在に気づかないような間抜けだったことに気づかれないように、冷静に振舞ったほうが良いだろうか。

奥寺のことだ、そんなことを知ったら一生のネタにされかねない。僕は一度深く深呼吸をしてから通話ボタンを押し、電話を耳にあてた。

「どこやー？」

唐突に聞こえてきた声に、いたい事もなくとも忘れて、頭の中が真っ白になり、反射的に携帯電話を投げ捨てていた。

あまりに興味が悪すぎる。

電話から聞こえてきたのは、奥寺のいつもの声などではなく、しわがれた、苦しげなうめき声だった。

足元に光る携帯電話の光を、僕はじつと見つめた。

なんだか、すぐにそれを手に取るのが躊躇われる。

それでもここに携帯電話を置いたままにしていくことも出来ない。これから絶対に必要になるものだ。

しかし、またあの声が聞こえてきたら、と思うと、拾い上げる手の動きは緩慢になった。

恐る恐る耳にあてて聞いてみる。

電話はもう切れていた。

ツーツーと不通音が繰り返されているだけだ。

そこからはあの恐ろしげな声も、奥寺の笑い声も聞こえてはこない。

今のは一体なんだったのだろうか。

普通に考えるならば、奥寺の悪ふざけに違いない。

かかってきたのは、確かに奥寺の携帯電話からだった。

日が落ちてビクついているだろう僕に、奥寺がイタズラ電話をかけてきたということなのだろう。

しかし……奥寺にそんな余裕があるだろうか？。

奥寺には地図もコンパスもないのだ。

暗闇に沈む山の中でひとりぼっち、手元に光る携帯の液晶だけがいつ消えるとも分らない灯台のような頼りなさで、しかし唯一の頼みの綱なのに。

それなのに、こんなイタズラを考えこそすれ、実行に移すだろうか？

自分に置き換えて考えてみたら、とても出来ないと言い切れる。辺りに満ちる暗闇の圧力は、僕にそんな悪ふざけをする気など、起こさせてはくれない。

そして、耳朶にこびりついた、あのぞつとする声を思い出す。

「どこやー？」

あの声はなんだったのだろうか？

明らかに奥寺とは違う声だった。作り声で出せるとも思えない程、その声は違っていた。

なぜなら僕にはあの声が、確かに女性のもののように聞こえたからだ。

しわがれた、苦しげな、甲高く、細く、震えるような声。

胸の奥がむかつく。

吐き気が込み上げて来る。

酷い悪戯だ。

伸ばされた語尾の中にほんの僅かだけ聞こえた気がする、微かな愉悦を含んだ喉の震え。

僕がああ電話をイタズラだと感じた理由が、そこにあることに気付いた。

電話を掛けてきた人物は、心底、あの言葉を発する時、喜びに満ちていたように感じたのだ。

期待感と言い換えてもいい。

待ちに待ったご馳走を目の前に出された時。

永らく音信普通だった親友からの手紙を、ポストの中に見つけ出したとき。

人はあんな声を出したのではなかったらどうか？

……いや、あの声はもつと「嫌な」ものだっただ。

復讐すべき人間の背中が、すぐ目の前に無防備にさらされている時。

激情に犯され、忍び込んだ押入れの隙間から、家主が何も知らず眠りにつくのを覗き見る時。

人はあんな風に喉を震わすのではないだろうか？

本当に奥寺とは別人ではないのか？

僕には、あいつにあんな声が出せるとは思えなかった。

別人だとしたら、何故、その人物は「奥寺の携帯電話」からそんな電話を掛けてきたのだろうか？

僕を見知らぬ山の中で、死ぬ程狼狽させるため？

そんなことをしてその人物になんの得があるのだ。

第3話

その可能性を必死に考えた。理論的に説明さえつければ、落ち着くことができる。

僕はとにかく、自分の納得の行く答えが欲しかった。こじつけだろうがなんだろうが構わない、とにかく今の僕の心の動揺を、少しでも軽くしてくれるのならば。

その時僕の中で、なにかが閃いた。なるほど、そういう事だったのか。

きつとこれは全て仕組まれたことだったのだ。

簡単な事だった。

奥寺は最初から、僕を引っ掛けようとしていたのだから。

筋書きはこうだ。

奥寺は比較的小心者な僕を引っ掛けるために、ちよつとしたイタズラを思いつく。

それは今、僕と共同で論文を書いている「陰陽人」に関係することだ。

「水無瀬万見聞」みなせよろずみききは水無瀬村の伝承を集めた本として、一部では有名なものである。

僕と同じく民族学を専攻する奥寺にとっても、馴染みの書物だったに違いない。

その中の「陰陽人」に関する一説を、奥寺は思い出し、それをイタズラに役立てようとしたのだ。

その話とは、二人の村人が山中で「陰陽人」の呼びかけを聞き、それに応えた村人が、失踪してしまうという内容のものだが、

奥寺はこれをなぞろうとしたのだろう。

まず、僕達の取材に一人、僕には内緒で、別の人間を同行させる。そして、僕ら二人が前を歩くのを、距離を空け、僕に気付かれないうちに、ずつついてきてもらう。

その人物は、きつと暇を持余した、奥寺の友人の女子学生かなにかだろう。

僕と余り親しくはないか、知らない人間。

陰陽峠までの道中、僕が不意に後ろを振り返ったとして、その人物が視界に入っても、意識に残らない程度の、赤の他人がいい。

奥寺の大学での交友関係は、その明るくノリの良い性格も手伝って、結構な広さだ。

僕は、とてもその全てを把握しているとは言えない。

『僕の見知らぬ』という条件に該当する人物は、きつ山ほどいたことだろう。

その中から、ひどく悪乗りする性格の一人を見つけ出し、地図、コンパス、ライト等、峠越えに必要な道具を持たせれば、準備は終わり。

僕らが取材を終え、暇を持余すのを見越して、出発の時間を早朝に設定する。

今思えば出発の時間を決めたのは奥寺だった。なんでも「念入りに現地調査をしたい。」という理由で早朝に出ることになったのだが、普段はそれほど学業自体には熱心に見えなかった奥寺の話としては、思いかえせばあやしいものだ。

それからなんとか僕を説得して実際に「陰陽峠」に引き入れる。

最初は気を張って緊張している僕が油断するのを待って、文字通り「峠を越えて」から、奥寺は脇道へ退場。

秘密の同行者も、それを確認して、脇道にそれる。

二人は脇道を少し行って、僕がついてこないことを確認すると合流。

辺りに暗闇が満ち、僕が不安感に苛まれるのをまって、いよいよイタズラ電話を掛けた。

きつと、そういうことなのだ。

それ以外に合理的な解釈は考えつかない。

そういえば、麓に住む老人がただ一人という「陰陽峠」へ向かう

ため、村を通り過ぎる途中、僕達に注がれる、奇異の視線を感じたように思ったが、それは変わり者を見る村人のものではなく、奥寺にそそのかされた「仕掛け人」のそれだったようにも思えてくる。そうだ、そうに違いない。

きつと性悪の奥寺と「仕掛け人」は、電話の向こうの、遠い闇の中で、堪えきれずに笑いを漏らしていることだろう。

いや、案外僕が見える程の近くにいて、笑いを堪えるのに必死になっっているのかも。

そう考えると、急激に腹が立ってきた。

僕の性格を知っている奥寺なら可能なことだろう。

だが、相手を心配する気持ちで、僕の足取りが鈍ることまで計算に入れていたのだとしたら、これは非常に悪質だ。

もしやどこかにライトの光が見えないかと、窮屈な携帯の灯り以外は完全に暗闇に没してしまった辺りを、透かし見るように目を細めて見渡す。

周りにそれらしき光はなく、音も聞こえない。

あるのはただ、落ち葉のこすれるガサガサという音と、山道を吹きぬける風の、口笛のような風きり音だけだ。

それでもなにか聞こえないかと更に神経を研ぎ澄まし……ほんの僅かな音も聞き逃すまいと……両耳に全神経を集中させる。

ぶるるるるる！

なんてタイミングだ！？

僕の携帯電話が、再び着信を告げた。

やはりどこか、僕の姿が見える所から掛けているのか？

僕は再び周囲をぐるりと見渡す。

どこに居る！？

ぶるるるるる　耳障りなベル。

僕は着信音を消音し、この闇のどこから、僕を嘲り笑っているだろう奥寺と、おそらくはもう一人を探し続けた。

樹齡何年経っているのか、見当もつかないほど古い巨木の裏。

こんもりと小山のように高く生い茂る草むらの影。

およそ人が隠れられそうな所は、片っ端から携帯の灯りを向けて確認していく……

十分な光量はないが、近づけばわかるはずだ。

自分の周囲10メートル程を、くまなく探し回った。

その間も携帯の液晶ランプは、着信を告げる点滅をつづけている。それはまるで、連続で焚かれるカメラのフラッシュの中で見るように、小刻みに周囲を闇から浮かび上がらせる。

暗闇に慣れた目を、容赦なく焼きながら続くストップモーションの連続に、脳が混乱し、平衡感覚を失いそうだ。

その中に一瞬、女の顔が見えた気がした。

！? …… 今のは…… 何だ？

一瞬視界を掠めるように見えた、あの顔は？

危険を感じ、反射的に、そのおかしなモノが見えた場所にライトを当てた。

…… なにもない。そのことに逆にほっとする。しかし、

確かになにか見えたと思ったのだが……

草むらか何かを、人の顔と錯覚したのだろうか？

心音が聞こえそうなほどに速まっていく心臓の鼓動。

気がつけば電話はすでに切れていた。

全身の筋肉が緊張して強張っている。

胃がぎゅっと音を立てるように収縮し、鋭い痛みが走った。

じきに痛みは溶けるように滲んで、じんわりと腹全体に染み渡っていく。

今あつた電話の着信を確認する。やはり 奥寺だ。

僕の胸に複雑な思いが湧き上がってくる。

ちゃんと電話に出て、奥寺に、そして底意地悪くもこのイタズラに加担した“仕掛け人”に、「趣味の悪いイタズラはやめろ！」と怒鳴り散らしたほうが良かっただろうか？

それともイタズラなどお見通しだと「ここやー」と、こちらも作り声で言い返してやれば良かったか？

でも電話に出て、もしあの声がまた聞こえたとしたら、僕は冷静に対処できるだろうか……

僕には……出来ない気がする。

きつと僕には、耐えられない。

あの、人間の厭らしくも醜い悪意を総ざらいして煮詰めた、穢れた蜜のようになってとりと絡みつく声を聞いてしまったら。

僕は、暗闇の中にも言い返せずに、その場で震えるだけだろう。……ではどうする？

今のように、着信を見なかったことにしてやり過ごすのか？

御伽噺のような過去の伝承に怯えて　奥寺のイタズラに屈するのか？

その選択の機会は、きつとすぐにやってくる。

今にも、稲光のように液晶が瞬き、僕にそれを迫るだろう。

そうなれば僕は、通話ボタンを押し、馬鹿正直にも音声を出力するスピーカーの穴と、自分の耳の穴をつなぐしかない。

そこから聞こえてくる“音”がなんであれ、僕は、それに対して何等かのリアクションを取る事になる。

なぜなら僕は、おそらく携帯から聞こえてくるだろう“呼び声”を、奥寺と誰かの共謀したイタズラだと、想定したからだ。

だから僕は　「陰陽峠」で「呼び声」に「応える」ことになるのだ。

……もういい、認めよう、僕は今、怖くて仕方が無い。

僕は、あの伝承を、事実ではないのかと思い始めている。

無論あの伝承の全てが、事実に基づくものだと思っているわけではない。

しかし、この「陰陽峠」の異様な雰囲気、実際に質量があるのではないかと疑いたくなる程濃密な暗闇に触れて尚、わざわざ“神隠し”に遭うとされている行動をとれる程、僕は豪胆ではなかった。

僕をこんなにも怯えさせている自分自身の感覚は、およそ理論的
とはいえないものだ。

言葉にすると、馬鹿馬鹿しい程に非現実的になる。

僕は、奥寺の携帯を通じて上げられた呼び声は、本物の「陰
陽人」のものなのではないのかと、疑っている。

自分で自分を笑い飛ばしたくなるほど滑稽だ。
でも、それでもいい。

山の雰囲気飲み込まれ、ありもしない妄想に取り付かれた臆病
者と罵られようと、今はこの、全身を痺れさせている“嫌な予感”
を優先させようと思う。

これほど臆病になってしまつほどに、この峠の様相は、非現実的
であるのだから。

出し抜けに携帯が、三度小刻みに明滅を始めた。

急激に鼓動を早める心臓。念のため、着信を確認する。

間違いない。奥寺だ。

僕は、ゆっくりと電源ボタンに親指を置き、ぐっと指先に力を込
めて押し込んだ。

チカチカと光を放っていた液晶は、辺りの闇に同化するように、
消えた。

辺りは完全な暗闇。

鼻をつままれても分からない、というのは、こういう闇のことを
いうのだろう。

携帯の光が無くなるのを待ち受けていたかのように、一斉に暗闇
は僕の全身に圧力をかけて来た。

身動きをとることが出来ない。

もう、こんな状態では、一步も歩けそうもない。

これで、無事に山を降りることが出来たとしても、翌日からは奥
寺に、僕の臆病ぶりをネタにされる日々が始まることになる。

僕は言い訳しようも無いほど完璧に、奥寺のイタズラに引つか
った臆病者として、みんなの失笑を買う。

または友の呼びかけを無視した者として、嘲られることになるのかもしれない。

悔しさが胸にこみ上げて、わけもなく大声で叫びたくなった。もう、どうすればいいか、分らない……

このまま、何が出てきてもおかしくない暗闇の中に立ち尽くしたまま、ただ時が過ぎ去るのを待つしかないのか？

叫びたい。

誰もいないことは分かっている。

しかし、大声で助けを呼びたい。

こんな暗闇は耐えられない。

どうして自分は、こんな馬鹿な行動に出てしまったのだろう。

なんの準備もなく、“神隠し”の伝承が残る山中に分け入ってしまったなんて……

後悔ばかりが湧き上がってくる。

誰か……誰か助けてくれ……

その時、ふと脳裏に、この夏に訪れた、村の神社での出来事が蘇った。

第4話

幾重にも続く小さな鳥居。

命を誇示するように叫ぶ蝉達の声。青々と生い茂った草木。どこまでも突き抜けるような青空。

そして、あまりにも長い「外具神社」の上社への階段。

へたばって鳥居の一つにもたれかかり、座り込んだ僕の汗まみれの顔の前に、唐突に差し出された、四つ折の、小さな白いハンカチ。驚いて見上げると、よく日焼けした女の子が、深青学園高等部の制服を着て立っていた。

早朝の、他に人影の見えぬ上社への階段の途中で、僕は、その少女と出会った。

容赦なく照りつける真夏の太陽の逆光で、顔は良くわからなかったが、口元にこぼれる白い歯に光が反射して、気付く。

少女は笑っているのだ。

全て伺い知れずともそれとわかる、あまりに警戒心のない明け透けな笑顔。

「どうぞ」と、一言だけ彼女が言った。

弾んだ声。夏にぴったりと、漠然と思ったのを覚えている。

僕は声も出せず、吸い寄せられるようにハンカチを受け取った。

少女の口元に、無邪気に浮かぶ三日月。

それ以上少女は何も言わず、自分の額に浮かんだ汗は、手の甲でぐいと拭い去り、

体重を感じさせない軽快な足取りで、跳ねるように階段を駆け下りていった。

ほどなく、その姿は石段の向こうに見えなくなった。

僕はハンカチを受け取った姿勢のまま、呆けたように、彼女の見えなくなったあたりを、しばらく見つめていた。

村の伝承の中にある「オツキサマ」という神格化された猫は、同

じく伝承に残る「ノウデンサン」のように、時に人の姿を借りて、村人の前に姿を現したという。

きつとそれは、今、僕の見た少女のようだったに違いない。そう考えると、なんだか嬉しかった。

ありがたく借りたハンカチは、いつか返そうと思いつつ、未だその機会を得られずにいる。

何度も洗濯を繰り返すうち、アイロンをかけても端がよれて皺になるようになってしまったそれは、とても返せた代物ではないけれど……それでも僕は、それを今も、持ち歩いている。

ポンポン、と軽く左胸を指先で叩く。

その指先に感じる、胸ポケットの内側の、薄い布の感触。

そして小さく叩く度に、ポケットの中から微かに立ち上る、甘く、馥郁たる香のような香り。

不思議なことにその香りは、何度洗濯をしても、落ちることはなかった。

つい癖になってしまった、気を落ち着けるオマジナイ。

まったく……子供じみていると自分でも思う。

突発的に湧き上がった大声を出したいという衝動は、不思議ともう無くなっていた。

先程から僕を浮き足立たせていた得体の知れない恐怖も、いつの間にか大分やわらいでいる。

残ったのは、一筋の光もない暗闇の中に立ち尽くす僕と、同じくらい頼りない決意。

とにかく、歩き続ける。

そして、この山を下りる。

一瞬、携帯の電源を入れなおして、警察にでも連絡してみようかと考えた。

だが事情を説明した僕に、警察はこう言うだろう。

「了解しました。これから救助に向かいますので、その場を動か

ず、待機しててください」

そんなことが出来るものか。

しかし山の中を進むというのなら、光は絶対に必要だ。

奥寺からの着信は拒否にして、携帯の灯りをライト代わりに使う
しかないだろうか？

しかし、悔しいながらも、僕は自分の決意の脆さを知っている。
携帯に電源を入れれば、必ずどこかに電話を掛けなくなるだろう。
そして口を開いて言葉を話す。

陰陽人は、本当に呼びかけに反応した者だけを攫うのだろう
か？

“声”さえ聞き取れば、そうでなくても居場所を知ることが出
来るのでは？

僕は………臆病なのだ。

ならばその臆病を徹底してやる。

携帯を灯りには使わない。

下山するまでは、口を開くことも、もうしない。

他に役立つ物が何かないか、荷物の中を確かめることにした。

手探りだけで、バックパックの中をかき回す。

………悲しくなるほど何もない。

本当に筆記用具とノートだけだ。

携帯電話を忘れていた程なのだから、他になにかあるのではない
かと思っただが………

その時指先に、チャラリと鉄の感触があつた。

家やロッカーの鍵等をまとめた鍵束だ。

これだ！

僕はその鍵束を取り落としたりしないよう、慎重にバックから外
へ出す。

確か………この束の中に………あつた！

カチリというスイッチの音と共に、手元に小さな光の玉が浮かぶ。

キーライト。

携帯の灯りよりは随分頼りないが、真つ暗闇より全然良い。

良かった・・・手探りでも山道を進む覚悟はしていたが、ほとんどそれは自殺行為だ。

キーライトの明かりは、立って足元まで照らすには不十分だが、中腰になって進めばなんとかなりそうだった。

山を降りる、という決意が鈍らないうちに、僕は歩き始めた。少しも先の見えない、暗闇の洞穴に向かって。

・・・この峠は、おかしい。

不安からくるパニック。昼に聞いた話からくる自己暗示。

僕がおかしいと感じることの理由は、いくらでも見つけられる。

だが、そんな物を超越した“何か”が、確かにこの峠にはある気がする。

実際にこの峠に入ったものにしか、分からない“何か”。

それは今、微かに吹く風の中にも、足元に積み重なる落ち葉の隙間にも、ひっそりと、しかしその内に獰猛な凶暴さを隠して、存在している。

地元の村人達が、この山を特別視する理由が、今なら分かる気がした。

あえて言葉にするならば。

それは 害意だ。

ここには、この「陰陽峠」には、侵入者に対する害意を感じる。明確な“山”という境界の内側に入ったものに対して向けられる、害意。

山に侵入するな、という警告を無視したものに、実際にどんな事が起きたのか、僕は伝承によって知っている。

“それ”が、実際にどのようなようにして成されるのかは、分からない。しかし“それ”を執行するものの名前を、僕は知っている。

「陰陽人」

それが害意の別名だ。

伝承は幾度も、幾世代にも渡って、連綿と口伝いに語り継がれ、警告を続けてきた。

曰く『「陰陽峠」には何人も、立ち入るべからず』と。

僕達の時代、その言い伝えは黴臭い文献の中にのみ見られる、過去の幻想となった。

警告は、その地に根付いて生きる者達にしか届かなくなり、その者達の間ですら、悪童を戒める以上の力を失ってしまったかにも見える。

では果たして「陰陽峠」そのものはどうなったのだろうか？

その伝承と同じように、山はかつての“神隠しの山”としての役割を終え、人間に侵犯され、蹂躪されるだけの、ただの土の盛り上がった地形と成り果ててしまったのだろうか？

その答えを、僕はわが身を持って思い知らされている。

厳然とそこにある事象として、たかが“山”だと慢心した、僕のような人間に鉄槌を下すのに十分な拳をもって。

“山”は、未だ死せず。

立ち入る者は神隠しに遭うという、閉ざされた山「陰陽峠」。

僕は今　確かにそこにいた。

僕は一刻も早く、ここを立ち去らねばならない。

ここは、人間の居て良い場所ではないのだから。

足元にライトを近づける。

赤茶けた枯葉の小山が、行く手にうねる波のように続いている。

一歩足を踏み出せば、ズブリと膝の下あたりまで沈んだ。

しめった落ち葉をミチミチと踏み抜く感覚は、ぬかるんだ沼地に行くのに近い。

今自分が立っているのが、もし崖の淵だったらと想像し、足を踏み下ろすことだけでも、相当の勇気がある。

僕は只、左右の足を交互に繰り出すことだけに集中した。

右足を上げたら、その着地点に次の地面があることを信じて、突

きこむ。

右足が運良く大地を探り当てたなら、今度は左足の番だ。
怖気づき、中々地面を離れたがらない左足を無理矢理に引き剥がして、上げ、突きこむ。

数歩足を進めるのにも、疲労感を伴う程の、緊張感に満ちた行進。

僕はそれを黙々と続けた。

山を降りる前に、僕の精神の方が持つかどうか。

こんなことならフィールドワークをもっとこなしておくんだった。
頭に浮かんでくる様々な後悔に萎えかける心を叱咤しながら、僕は進んだ。

右・・・・・・・・左・・・・右・・・・左・・・・

・・・・・・・・もうどれくらい進んだらうか？

ライトの明かりの中に、息も白く霞むほど冷え込んできているというのに、額からは汗が、絶え間なく滴り落ちてくる。

ぜえぜえと肩を上下させる僕の体力は、もう限界に近づいていた。
終わりの見えない行進。

行く道も定かでない不安。

吹くたびに体温を奪っていく木枯らし。

それらが渾然一体となつて、僕の全身を蝕んでいた。

右・・・・・・・・左・・・・右・・・・左・・・・

脳がジーンと痺れたようになってくる。

足を照らすキーライトの光が、弱く、小さくなつてきているのは、僕の視力が疲労で鈍つてきているからなのか。

もう、そんなことすらきちんと判断できないところまで、僕は追い詰められていた。

変化は突然に現れた。

目の前にかけられたベールを、一瞬で剥ぎ取られたような錯覚。
いつのまにか僕は、木々の疎らになった、直径30メートルほどの円形の広場に出ていた。

左手の密度の薄くなった木々の間から、ぼんやりと瞬くいくつか

の灯りが見えた。

僕はそれがもつと良く見えるところまで近寄り、木々の間から、眼下に広がる幾つもの光点を、眺める。

実感が沸いてくるまでに、しばらく時間がかかった。

……麓だ！

目を凝らせば環状線の駅が、そのすぐ脇には女子寮の高層ビル群が、天空に突き抜けた塔のように聳え立っているのが見える。

教師に居眠りをたたき起こされた学生のように、心臓がドクンと大きく跳ねる。

ぼやけていた視界のフォーカスが、段々と正常に近づくにつれ、胸の内から、安堵と喜びが湧き上がってきた。

やはり自分のとった行動は間違いではなかった。
歩き続けたことは無駄ではなかったのだ。

尽きかけていた筈の力が、再び体に蘇ってくる。

いける！ もう麓はすぐそこだ。

見上げれば中空には満月が、煌々と光を放って辺りを照らし出している。

それは僕の立つこの広場にも降り注ぎ、行く手に、確かにそれと分かる麓への山道を照らし出していた。

薄暗いキーライトの光に頼ることも、もう必要ない。

足元を確認するにも十分な光量が、すぐ先に続く山道には満ち満ちている。

そこを下りて行けば、30分もせずには麓に辿り着くだろう。

そこからまた駅までは少しあるが、この山さえ降りてしまえば、あとはもうどうとでもなる。

もどかしくも山道に駆け寄ろうとした僕は、慌てて足を止めた。

今なにか聞こえなかったか？

耳を澄ます。

……イイイイイイ

確かに聞こえる。風の音とは違う、もつと甲高いものだ。

イイイイイイイイイイイイ……

その音は、どんな僕がいる広場の方へと向かってくる。

山の上方から、僕の通ってきた道から、大きく、はっきりと聞こえてきている。

ヒイイイイイイイイイイアア……

これは……悲鳴だ！ 人間の、女の悲鳴だ！

僕は咄嗟に広場の端の方にある大木の陰に身を潜め、しゃがみ込んで様子を伺った。

程なくその悲鳴の主は、月明かりに照らし出された広場に、殆ど四つん這いの格好でまろびでてきた。

恐怖に歪んだ顔を、見開いた両目から溢れ出る涙でぐしゃぐしゃにしながら現れたのは、僕の知らない女性だった。

彼女は、口の角に泡を立てたまま意味不明の甲高い叫び声を上げ、広場の中央を転がるように横切っていく。

山道であちこちぶつけたらしいその体は、所々今も血が流れ、服は上下とも襷褌屑のようになってしまっている。

どうやら僕と同年輩のようだが、常軌を逸した崩れきったその表情からは、判然としなかった。

僕と奥寺の他に、この峠に人間がいたのだ。

影に隠れて様子を伺う僕に気付く気配もなく、その女性は何度も何度も、自分の今来た方向を振り返りながら、僕のすぐ目の前、数メートルのところにある茂みの中に飛び込んだ。

此処から、うずくまって頭を抱えている女性の姿が、はっきりと見える。

その首から伸びた紐の先にぶら下がっているのは………携帯電話だ。

僕が前に考えた妄想に等しいこじつけは、あながちはずれでもなかったのかもしれない。

だが 僕の考えが正しいとするなら、この女性は“仕掛け人”ということになる。

しかし、僕を驚かせる役割のはずの仕掛け人が、なぜこうも恐怖し、怯えきつているのか？

全く状況が掴めない。

僕は、この異常な状況を見極めるため、しばらくは様子を伺うことにした。

先程の女の行動を落ち着いて考えてみれば、彼女の他にも何者かが存在し、その存在こそが、彼女を此処までの恐慌に陥れていると考えることが自然だ。

それは一体なんなのだろう？

順当に考えれば奥寺、ということになるのだろうか。

となるとこの女性は、僕の妄想の中の“仕掛け人”などではなく、僕と同じように、奥寺に騙されている“犠牲者”なのだろうか？

麓へ続く山道はすぐそこなのに・・・もどかしさに胸を掻き毟りたくなる。

でも 今は我慢する時だ。

彼女の怯え方が演技で無い限り、彼女をここまで憔悴させているなにもものかがいるのだ。

もう大丈夫だ、と一言声をかけた方がいいのだろうか、その正体を見極めない内に、軽はずみな行動をとることは躊躇われた。

完全に安全を確認してからゆっくりと下山するのが、最も確実な方法だと思う。

そうしなければ、今までこの山道を進んできた苦労が水の泡になっってしまうかもしれない。

程なくして 僕の、そして彼女の出てきた山道から、また別の音が聞こえてくるのがわかった。

うずくまっていたままの女性もそれに気付いたのか、両肩をびくりと振るわたのが見える。

彼女は全身をさらに小さく丸めて、まるで胎児のような格好になっってしまった。

両親指を除く指を全て口の中に入れ、がくがくと震える上下の歯

の間に突っ込んでいる。

彼女は、目を閉じることせず、怯えた焦点の合わぬ視線をでた
らめに彷徨わせていた。

しかし……きつと彼女には何も見えていないだろう。

今自分がどんな状態にあるのかということも、分からないに違
ない。

音はやはりこちらに向かって大きくなってきている。

これは……人の声か……

節のついた、なにかの歌のようだ。

第5話

ねんねこ、ころり、ころころり
まんまる おつきさま ころころり
いしどうふたつ、じょうひとつ
なしひと、かまたのたつさきの
しろがね、じょうまえ、かちゃ、ことり
さきはまほるば、ゆめのくに

ゆっくりとした、まどろむような女の声。
これは多分……子守歌だ。
僕はぐくりと唾を飲み込んだ。

こんな山のなかで、子守唄など歌っているものが、正常な人間であるはずがない。
後を引くか細い声の合間に、時折漏れるくすくすという笑い声。
僕の頭の中の本能の部分が、割れんばかりの警鐘を打ち鳴らしている。

絶対に、その存在に見つかってはならない。
僕は息を殺し、ただじっと、大木の陰から、様子を伺いつづけた。
山の上方から広場が続く山道に、最初に見えたのは小さな光だった。

その上に、アップライトで不気味に陰影のついた、女の顔が浮かぶ。

年の頃は30代といったところだろうか。
どうやら女の胸元に、灯りがあるらしい。
その姿が近づくにつれ、強くなる月明かりで、その女の姿のかなり仔細なところまでわかるようになった。

女は紬をきていた。

取り立てて特徴のない、よくこのあたりの村人が着ている、平凡

な柄だ。

しかし、平凡なのはそれだけだった。

四方八方に伸びるばかりにまかせてある、ぼさぼさの長髪。

つやを失った黒い蜘蛛の糸のような髪の間から覗く、一目見ただけで狂っていると分かる眼差し。

両目は大きく見開かれ、夜行性の獣を思わせる壮絶さを秘めて、又ラヌラとぬめ光っている。

黒瞳は絶えずあちこち動いては、時折ぴたりと止まり、対象を目で射殺さんばかりの鋭い眼光で、一点を凝視する。

足元には枯葉の山がまとわり着いて、膝丈から下の着物は、すっかり隠れてしまっている。

なのに着物の女は、そんなことはまるで障害になっていないとでもいうかのように、滑るように地面を歩くのだ。

驚くほどすいすいと、あの歩きづらい山道を降りてくる。

僕は息を吞んで、その女を注視した。

女の胸には、赤子のおくるみが、大事そうにしっかりと両手でかえられている。

そのおくるみが、どんな仕掛けか小さな燐光を発して、女の顔を浮かび上がらせていた。

子守唄はまだ続いていた。

女に抱かれた赤子が、もぞりと動く。

女はそれをあやす様に、ゆっくりと上下におくるみを揺すった。

赤子の頭の部分の布がはらりとずれて、その顔が月光の下にされけ出され……

それを見た瞬間、僕はすぐにでも目を逸らしたくなった。

……ああ……ああ……なんてことだ。

古ぼけた錦布の間から覗く顔に、見覚えがあった。

あれは……赤子などではない　奥寺だ。

奥寺は何事か口を動かして、女に話しかけているが、その声はこちらには聞こえてこない。

必死の形相でせわしく手に持った何か　　あれは携帯か　　を
操作している。

女の顔を彩る不気味な陰影は、その携帯の光が作り出したものだ
ったのだ。

しかし、それにしては妙だ。

どう見たって妙なのだ。

着物の狂女の胸に抱かれる格好の奥寺の体は、ここから見て“本
物の赤子”程の大きさしかない。

では、一体、女の体は

ガサガサ、ザワザワという枯葉のこすれ合う音と、不気味な狂女
の子守歌は確実に大きくなっていき

ついに女は、広場に全身をさらけ出した。

その全容は否応なしに、僕の視界に飛び込んでくることになった。
驚きのあまりに、思わず声が漏れそうになる。

咄嗟に自らの左の腕に噛み付いて、寸でのところで押し殺す。

運の悪いことにそこは、先程コンパスを探す時についた傷と同じ
箇所だった。口の中にどろりと血の味が広がり、遅れてじんじんと
鈍く疼く痛みが、それを追いかけてくる。

しかしそんなことも露ほども気になることはない。

広場に立つ女の異常さが、僕の肉体の感覚をほとんど麻痺させて
いたのだ。

腰を更に深く屈め、身を隠し、様子を伺う。

女は　　大き過ぎた。

おそらく身長は5、6mはあるのではないだろうか。

こんなに大きな人間は　　存在しない。

「陰陽人」

この狂女こそが、村に伝わる数多の伝承に名を残す、峠の住人に
他あるまい。

昔の村人達が、見慣れぬ西洋人を見てどうか、継ぎ足をしてい
るのではないかとか、そういう段階のものでは、すでにない。

巨大な、あまりにも巨大に過ぎる体躯。

多足生物のように奇妙な、すべるような足取り。

ディテールそのものは、忠実に人間の形を再現している上、言語も操る、人ならぬヒトカタ。

皮膚の下には、峠を侵す者への害意が流れ、悪意が脈打つ。

これが………陰陽人なのだ

陰陽人とは、何か特別な状況におかれた人間の別名などではなく完全に人間とは種を別にする生き物だったのだ。

それは、まさに怪物。

人が未だに認知したことのない、生命。

木々がドーム状に周囲を囲む広場の、ほぼ中央まで女は歩み出た。ぐぐつと顔を地面近くまで近づけると、ぐるりと辺りをねめつける。

「おらんかー！」

狂女の叫びが広場に木霊した。長髪が鞭のように波打ち、枯葉を宙に巻き上げる。

その風は僕の隠れている木の枝葉をも揺らした。

僕は全身を震わせて、見つからないように祈った。間違いない。

この声は、最初の電話の時のものと同じだ。

暗い愉悦を湛えた、おぞましい呼び声。

もし最初の電話に応えていたなら

「くそおおおお！」

次に聞こえてきたのは、奥寺の絶叫。

「なんで出ねえんだ！　なんで！？　出ろよ！サカイギイイイイイイ！」

聞いたことのない奥寺の怒号。僕が電話に出ないことへの単純で、激しい怒り。

「はやくしろっ！　でろっ！」

電源を切った僕の携帯に、電話がつながるはずもない。

それは恐らく、奥寺も十分に承知している事だろうが。

それでも尚、電話をかける事が止められない程、奥寺は追い詰められているのだ。

陰陽人は、胸元の奥寺をギロリと見下ろした。

「嘘か？われのやや子を見たりしと、お主……嘘を申したか？」

「う、うう、うそじゃないい、うそじゃない！ いるんだ、ほんとに。今、声を聞かせるから！ な、ちよつとまってくれ……なんなんだよ！ 電源切るとかマジかよ！？ 友達の電話なら、でるだろうがよ！ フツー！」

「嘘か……われを騙し、ぬかよろこびさせるとは憎し……」

喉の奥から搾り出すような声。

悔しさに歯噛みする陰陽人の眼光は更に鋭さを増し、険しく寄せられた眉の下から、そうすれば人を殺せるとでも言わんばかりに、奥寺を睨む。

ひつ、と奥寺が息を呑むのがわかった。

「ちいい違う、違うんだ……もう少し」

「もう 峠も終わりや」

「まだあはあ！ まだなんだあ！」

「……おおやあ……くるみに粗相とは、まことの赤子のようなり……ホホホホホ！」

陰陽人の哄笑が広場を埋め尽くし、わんわんと頭の中に鳴り響く。耐えられずに両耳を手で覆っても、それは指の隙間から潜り込んで、頭蓋骨の中で、ぐるぐると渦を巻いた。

「サカイギイ！ このクソ野郎！ 電話に出ろ！ クソツクソツ！ でえろおおお！」

なんなんだ 奥寺、お前は？

お前は僕に電話に出させて、どうしようとしてるんだよ？

「はて、我のやや子はサカイギといったかの……そうじゃ、

そうじゃ、サカイギや。可愛やの、可愛やの」

「頼む！ サカイギ！ 聞こえてるんだろ！？ オレを助けてくれよう……」

奥寺の囁き無く声。

身も世もなく、ただ自分の保身を願うばかりの、身勝手な嗚咽。

「しかし 見つからぬなら、貴様を連れ去るより仕方なし」

陰陽人は、自分の言葉がどんな効果を奥寺にもたらすのかを十分に考慮した、厭らしい声を出した。

そういう事なんだろ？

どうしてかは知らないが、お前は禁を破り、陰陽人に捕まった。それ自体は責められることじゃない。誰もとうの昔に廃れてしまった伝承の怪物が、街から然程離れてもいない山の中に、実際に存在するなんて思いもしないだろう。

けれど、今お前がしようとしていることは、なんだ？

僕に、自分の「呼び声」に「応え」させて、どうしようというんだ？

いくら混乱しているとはいえ、今の会話から、ある程度の予想はつく。

奥寺、お前は 自分の身代わりに、僕を差し出して、助かろうというのだろう？

電話の声を聞いた瞬間に抱いた嫌な感じは、見事に的中していたというわけだ。

憐れな 奥寺。

奥寺は絶え間なく、電話に出ない僕を罵っている。

何処とも知らぬ場所へと連れ去られることに、間接的に加担していることを非難し、蔑んでいる。

しかし、不思議と怒りは沸いてこなかった。

感情自体が麻痺しかけていたというのもある。

が、大木の陰から奥寺の狂乱する様を見て、体を震わせているこ

としか出来ない僕には、そのことで怒る資格があるようには思えなかったからだ。

もし仮に、僕が奥寺と逆の立場であつたなら、怯懦し、追い詰められて、同じことをしていたかも知れない。

恐慌に陥って、必死に助かるうとしている奥寺を責めることは、僕にはできなかった。

「いやだあああ……待ってくれ！ 頼むよう……あああ……どうしよう……どうし……！」

喚き続けていた奥寺の声がピタリと止んだ。

唐突に訪れた静寂に、僕は疑問を感じた。

ぎりぎり見つからない程度に顔を覗かせると、奥寺は無言で、憑かれたように携帯を弄っている。

つい今しがたまでの狂態が、まるで嘘のように。迷路に囚われたものが、出口を見つけた時のように。

嫌な、予感がした。

ピルルルル！

一瞬の間をおいて、携帯の着信音が、辺りに鳴り響いた。

嘘だ、ありえない。

僕の携帯は確かに電源を切つたはずだ。

着信があることなど考えられない。

ジーンズの後ろポケットから、震える手で携帯を取り出す。

僕の携帯は全く反応していない。

なのに着信音は、僕のすぐそばで、鳴り続けていた。

火花が散つたように閃いて、僕は、隠れている大木の程近く、すぐそこにある茂みに隠れた、もう一人の“峠への侵入者”の事を思い出した。

確か 彼女も携帯を持っていたはず。

予感的中した。

月影にも鮮やかに、彼女の携帯は連続で発光を繰り返している。奥寺のやつ……まさか！？

奥寺がニヤリと不気味に笑うのを、僕は確かに見た。

何故奥寺が、彼女の携帯の番号を知っていたのか。

彼女と奥寺の関係は、どんなものなのか。

分からないことは幾つもあったが、奥寺の目論見だけははっきりと分かった。

奥寺は、電話に出ない僕に見切りをつけ、自らの身代わり候補の予先を、彼女に向けようとしているのだ。

携帯番号を知っているぐらいだ、奥寺は、彼女とそれなりに親しい間柄にあるのだろう。

それなのにそんな人を、しかも女性であるのに、自分の身代わりとして、あの化け物に差し出そうというのか。

自分に危険が及べば、ここまで人間は、身勝手になれるのか。僕は全身を振るわせた。

恐怖にではない、怒りにだ。

この時になってようやく、腹の底から、奥寺に対する怒りが吹き上がってくるのを感じた。

鳴り響く着信音の源を見つけ出そうと、陰陽人はギョロギョロと四方に視線を巡らせている。

携帯の光で、彼女の居所は一目瞭然のはずなのに、それが見えていないらしい。

これならば、もしかしてこのままやり過ごせるかもしれないと、微かに希望を感じたところに……

「あっちだよ！ あっち！ ほら、見えるだろ？ あの茂みのところだ」

喜々とした声を上げながら、奥寺が僕達の隠れている方向を指差した。

奥寺……お前は……

「ここかえ？ ここかえ？」

陰陽人は奥寺の誘導で、ゆっくりとはあるが、確実に彼女に近づいて行く。

彼女は一体何をしているんだ？

早く電話を切らなければ見つかってしまうんだぞ！？

再び、視線を茂みに向けると、四つんばいの格好の彼女が見えた。肘を立て、携帯を顔の前に掲げた彼女は、それが何を意味するのか分からないといった風に、不思議そうに点滅する光を眺めていた。口元にはうつすらと張り付いたような笑みが浮かび、口角にはドロリと泡が、顎の方までこびりついている。

絶望に濡れる焦点の合わせぬ両眸から、止め処なく涙が流れ、携帯の光を反射しては、地に落ちていく。

彼女もまた、陰陽人と奥寺のやりとりを聞いていたはずだ。

そうであれば、今自分の身に起きていることがどういう類のことなのか、容易に想像がつくはずなのに……

そうしている間にも、彼女と陰陽人の距離はどんどん詰まってく。

まずい、本当に見つかるぞ！

着信音が不意に途切れた。

そうだ、いいぞ！ 電源を切ったんだな？

しかし、僕の目に映ったのは、携帯を耳元に持っていく彼女の姿だった。

信じられない。

なにを…….しようとしているんだ？

奥寺は君を、自分の身代わりにしようとしているんだぞ？

「ひゃほっ！？」

間の抜けた奥寺の声。

電話がつながったことが、そんなに嬉しいか？

奥寺の喜びようは、まるで小躍りでもしそうな程だった。

「ほらっ！ ほらっ！」

と陰陽人の口元へ、電話を突き出す。

「呼んでみる！ ほらぁ！」

酷い…….こんなやつだったなんて…….

最早自分の知っている人物ではなくなってしまった奥寺を眺めながら、僕は思った。

自分が助かることだけを考えるなら、僕はそのまま、傍観を決め込めばいい。

この馬鹿らしい、ふつてわいたような唾棄すべき“ババ抜き”の当事者は、奥寺と、僕の見知らぬ女性の二人の番へと移り変わっている。

あとは耳を塞ぎ、この場をやり過ごし、見たものを忘れてしまえばいい。

僕がした行動は“気味の悪い電話をとらなかった”ということだけだ。

なにを責められる謂れがあろうか。

「どこやー！」

その声に木々が震えた。

聞くだけで、心が濁っていく声。

決して応えてはいけない呼び声。

ひゅつと彼女が息を呑む音が聞こえた。

ひくつく唇が、除々に開いていく。

後は、ほんの少し喉を振るわせるだけで

彼女は禁忌を、犯すことになる。

僕はその時、彼女の目を、見てしまった。

彼女も、僕を見ていた。

それを何と言って、それを表現すればいいだろう。

なにも映していない、認識をする器官としての役割を、完全に放棄した目。

その奥に、黒瞳の水面に揺らめきを残して沈んでいく、彼女の心が見えた。

それは僕には救いを 求めているように見えた。

「ここだ！ ここにいる……」

気がついた時には、僕は大木の陰から飛び出し、叫んでいた。

ありつただけの力を込めて叫んだつもりが、語尾は擦れた裏声になった。

ぽかんと口を開けたまま、突然現れた僕を、見開いた目で見上げる彼女。

僕はそれに目を合わせないように茂みの脇をすり抜け、広場の中央へと、歩を進めた。

「境木い！？ お前え……………そんなとこにいたのかよ」

近づいてくる人物が予想と違い、奥寺が驚きの声を上げる。

僕はそれを黙殺し、奥寺を睨みつけた。

「なんでお前が祥子の携帯もつてたのか知らないけどよ、やあーつと繋がったってわけだ！ ヒヤハハ」

にやけ顔で言う奥寺から目を逸らさずに、前進する。

そうしなければ、がくがくと笑う膝から、力が抜けてしまいそうだった。

近づくにつれ、陰陽人の異様さが、さらに際立つ。

なんて大きさだ。

こんな化け物が、現存しているなんて……………

「おお！ おお！ 可愛やの、可愛やの」

限界が無いのではないかと疑われるほど、どこまでも吊り上っていく陰陽人の口端。

「奥寺……………これはどういうことだよ？ なんでこんな事になった！？」

「しらねえよ！ ちょっとフザケようとしたただだよ！ それよりお前、携帯切ったろ！？ おかげで苦労したぜ！」

「フザケるって、なんのことだ？」

「お前をからかってやろうと思ったんだよ！ 今鳴った携帯の持ち主と一緒に！ 二人でお前を驚かそうと思ってたんだよ！ お前と別れた後合流する予定だったんだ。」

そこへ向かう途中だった、聞こえてきたんだよ「どこやー」って、オレはてつきり祥子が悪フザケしてるんだと思って応えたさ！ 「

「ここやー」ってな。そしたらどうだよ!? 現れたのはホンモノだったんだ! 見ろよコイツ、笑っちゃうだろ? まさかホントにいるなんてな! ヒヤハハハ」

なるほど奥寺のイタズラに関する、あてずっぽうの僕の妄想は、ほぼ当たっていたのだ。

一番当たって欲しくなかった「仕掛け人」が、本当の「陰陽人」だということについてさえも、ものの見事に、だ。

「ぐえ」という、ひき潰されたカエルに似た声とともに、奥寺の哄笑は突然に打ち切られた。

地面に無造作に奥寺を投げ捨てた陰陽人が、いつのまにか僕の目の前に立っていた。

饅えたような黴臭い陰陽人の臭いが、強烈に僕の鼻腔を貫く。その着物の綻びすら見つけられる程の距離。

「可愛やの、わがやや子はの。さあ来たれ。共に里に帰るべし……
・・・ホホ・・・・・ホホホホ!」

ぐっと近付けられた顔の恐ろしさに、気を失ってしまいそうになった。

ピクピクと細かく痙攣する瞼。

血走った目玉の中心にある、奈落のような瞳。

ふっと遠くなりかけた意識を、慌てて捕まえると同時に後悔した。そのまま気絶していたほうが、どんなにか楽だったろうと。

陰陽人は、今にも掴みかからんばかりに手を広げ、ゆっくりと隅々まで値踏みするように、僕の周りを回り始めた。

このままでは、自らが“神隠し”を経験する羽目になる……

何処かに連れさらわれた後、どんな目に遭わされるのか分からない。い。

すぐに殺されてしまうことはないのかもしれないが、その前に、とても正気を保っていられる自信はなかった。

かといって、この絶望的とも思える状況を打開できそうな名案も

浮かんではこない。

僕は、ただただ祈るように、中空に浮かぶ満月を仰いだ。

薄い雲の帷子の向こう、濁天にぼ々と浮かぶ、真円の月。

おそらくこれが、僕が境木秀明として見る、最後の光景。

どうしてこんなことになった？

第6話

ついに陰陽人は僕の周りをぐるりと一周し、また僕の目の前に現れた。

片手をゆつくりと僕の首根っこの辺りへと伸ばしてくる。

大声を上げて駆け出したくなる衝動を懸命に抑えて、満月を見上げながら、僕は“その時”を待った。

ぴたり、と陰陽人の手が止まる。

そしてまた、つい今しがたと同じように、僕の周りを周り出す。どうした、のだ？

その様子は明らかに一度目とは違うようだった。

よりゆつくりと、思案気に、注意深く。

そして、何かを警戒でもしているかのような唸り声を、時折漏らしている。

生暖かい陰陽人の吐息が首筋にかかる度、冷や汗が滝のように流れ、生きた心地がしない。

一体僕の何をいぶかしんでいるのかは分からないが、少しは考える時間ができた。

このままなんの案も無いままでは、僕の運命は決まったようなものだ。

しかし、なにか思いつかないかと頭をフル回転させても、焦りばかりが先に立つて、一向に考えがまとまらない。

くそっ落ち着け！ 落ち着いて考えるんだ！

またきつちり一周りした陰陽人は、正面からぐっと顔を近づける。視線を微妙にずらして、正視しないようにしても、首をかたむけて僕の顔を覗きこんでくる。

疑惑に満ちた、納得がいかなさそうな顔で、陰陽人の目がぎゅっと細められた。

「われの子は、かくもにほわず……………あやしや……………」

しわがれた呟き声。

臭いとは……なんのことだろう？

陰陽人は、ほとんど触れんばかりに更に顔を近づけ、今度はなんと鼻を鳴らし始めた。

足元から序々に、全身の臭いを嗅ごうとしているのだ。

せり上がる巨大な顔面がもたらす恐怖感に耐えるのが精一杯で、とても考えることなどできない。

気を静める……冷静に……冷静に……

僕の手は、自然と左胸に伸びていた。

トントンと二回、指先で触れる。

陰陽人が、びくりと体を震わせ、動きを止めた。

「にほうたぞ。いま、なんとした？」

お碗大の目で、ぎろりと上目遣いに、僕を見上げる。

僕は訳も分からず、何度も首を横に振った。

「にほうたぞ。あやしや……あやしや……」

陰陽人の動きが、妙にせかせかとしたものになり

「どこや……どこや……」

と鼻を鳴らしながら、顔を上下左右に激しく動かし、何かを探し始める。

もしか

僕は、胸ポケットからハンカチを取り出すと、陰陽人の鼻先に突き出した。

突然目の前に現れたハンカチを不思議そうに眺めながら、

何を思ったか陰陽人は、すうつ、と鼻で思い切り息を吸い込んだ。

途端、目が限界を知らないかのように見開かれていき、一瞬の沈黙が訪れた後

「エオオオオオアアアア！」

鼓膜が破れそうな大声で陰陽人は絶叫し、顔をのけぞらせた。

暗闇に青白くぬめ光る陰陽人の咽喉が、怪しげに蠕動し、濁った音を立てる。

僕は、呆気にとられ、その場に立ち尽くした。

水飲み鳥の仕掛け物のように、前に振られる陰陽人の頭を、僕は呆然と見ていた。

「オゴオオオエエエエエエ！」

異様に粘り気のある液体が、陰陽人の口から吐き出され、僕の頭に振り注ぐ。

咄嗟に両手で頭を庇いながら後ろに飛び退ったが、謎の汚汁がビシヤリと嫌な音を立てて、腕にかかってしまった。

見ると、左腕が赤黒く染まっている。

鉄錆の臭いが強く鼻をついた。

これは 血だ。

陰陽人に視線を移すと、口と同じように、両目、両耳からも血液を噴出させながら、

両手で顔を覆い、ぶんぶんと上体を振り回している。

傍にあった何本かの木々が、巨体にぶち当たり、ミシリと嫌な音をたてて軋んだ。

まるで暴風のように荒れ狂う陰陽人から慌てて離れ、手頃な木の裏に隠れようとして、僕の左腕に突然激痛が走った。

燃えるような痛みにも、堪らず両膝を突く。

月明かりにかざして見れば、先程悲鳴を抑えるために、自分で噛み付いた傷口から、薬品が化学反応を起こしている時のものに良く似た、白い煙のようなものが、細く尾を引いて立ち上っている。

「あああああああ！」

反応しているのは、他でもない僕の血と、陰陽人の血だ。

なにか取り返しのつかないことになった感覚に、僕は声を抑えることができなかった。

手にきつく掴まれていたハンカチで傷口を縛るも、すぐに血を含んでグズグズになってゆく。

灼熱の感覚は腕から、全身に及び始めていた。

体の中に、煮え滾った溶岩が流れ込んでしまったかのような。

四肢が自分の脳の制御を受け入れずに、てんで勝手ばらばらに動き出す。

僕はのたうち、泣き喚き、辺りを転がった。

「オオオオオ！ 外具や！ 外具の子おや！ 外具の子をわれの子と欺くとは、許すまじ！」

流血の止まらぬ両目をかつと見開き、齒を剥き出しに荒ぶる陰陽人の姿が、ちらりと視界の隅に映る。

「きつと！ 殺すべし！」

それは正に、鬼と呼ぶにふさわしかった。

痛みに曇った頭でなければ、それだけでおかしくなっていたかも知れない。

「……ああ……僕は殺されるのだ。」

山の禁忌を破ったために、こんな人気の無い暗い山中で。

誰にも知られることもなく、殺されてしまうのだ。

後少しで、麓に降りられたというのに……

悔しさと、死を目の前にした恐怖に、奥歯を噛み締める。

しかし、陰陽人は、いつまでたっても近づいてくる気配がなかった。

なんとか頭を起こし、辺りを見渡す。

それは僕に向けられた言葉ではなかったのだ。

陰陽人は怒りも顕わに、奥寺の放り投げられた辺りに歩み寄ると、奥寺の髪を鷲掴みにして、宙に吊り上げた。

「う……あ？ ひいひいひい！」

地面に叩きつけられたショックで、意識を失っていたらしい奥寺は、それでようやく目を覚ましたようだった。

「いゝいゝ！ 離せよ！ お前の子供はあっちだろうが！」

血まみれの顔の陰陽人に睨まれ、倒れ伏す僕の方を指差して、狼狽する奥寺。

気絶していた奥寺には、どうしてこんなことになっているのか、全くわからないだろう。

「……まだ申すか……貴様！　こうなれば、殺せ
と自ら乞ひ願うまで、いたぶるべし！」

「なんだよそれ！？　なんなんだよ！」

「来いや！」

「はあ！？　わかんねえ！　イテエよ、おいやめろ！　サカイギ！
？　サカイギ！　どうなってんだよこれは！　お前返事したじゃ
ねえか！　なんで……オレが……やめてくれ！
オレを連れていかないでくれ！　いやだああああ！　サカイギ！
助けてくれえええ……」

僕にはその奥寺に応えてやれる力は、残っていなかった。

霞む視界の中、じたばたと暴れる奥寺をもともせず、山奥へ
と、今来た山道を戻っていく陰陽人の姿が遠ざかって行く
同じように小さくなっていく奥寺の声。

痛みに焼かれる僕の脳髓に限界が訪れ、意識が途切れると同時に、
その声もまた

途切れた。

あれから、一月が経っていた。

今では、意外に深かった腕の傷も、跡形もなく治っている。

あの日、麓近くの山中で気を失った僕は、水無瀬市街中心部にあ
る「水無瀬中央病院」のベッドの上で目を覚ました。

丸二日程、眠っていたらしい。

僕がだらしなくも気絶した後に、奥寺が祥子と呼んでいた女性が
自力で下山し、救助を呼んでくれたのだそうだ。

……彼女とは、あの峠での出来事以来、会っていない。
精神的に深い傷を負ってしまった彼女は、個室のある隔離病棟で、
今も治療を受けており、僕からの面会の申し出は許されなかった。
事件の当事者である僕と会うのはまだ早い、という医者の説明だ
った。

最後に山中で見た彼女の様子では　確かに時間がかかって仕

方がないと思う。

……もしかしたら、もう会うことは出来ないのかもしれない。

救助を呼んでくれたお礼を、ちゃんとしておきたかったが、そういう事情であれば、どうしようもなかった。

奥寺は　やはり戻ってきてはいなかった。

これでまた“陰陽峠の神隠し伝承”に、また一つ、新たな話が加わる事になってしまったわけだ。

目を覚ましてからの僕は、警察の事情聴取に明け暮れて過ごした。多量の返り血を浴びて発見された僕と、失踪した奥寺、精神に異常をきたした奥寺の女友達、祥子。

そして山中の広場に残された夥しい血痕。

誰の目が見ても、事件性は十分だった。

当事者の内、聴取に応じられる状態の人間は僕一人だけであり、その時間が長引くのは当然のことだろうとも思ったが、

警察が、僕こそがこの事件を起こした張本人ではないかと疑っているのが、ありありと伝わってきて、その点は流石に堪えた。

一人の女性を巡って痴話喧嘩となった僕と奥寺の二人が、人気のない山中で争い合い、僕が奥寺を刃物か何かで殺傷した。

というのが、当初の警察の見方だったようだ。

現場の状況から現実的に判断すれば、なるほど、そう思えなくもない。

しかし、当然のように凶器は発見されなかったし、僕の衣服や体に付着していた血液は、奥寺のものとは全く一致しなかった。

それ以前に血液は　“人間”の物ではない、と断定された。その取調べに対して僕は「得体の知れない巨大な生き物に襲われた」とだけ証言した。

本当の事を言っても、信じてもらえない訳がない。

その後、奥寺を捜索するために編成されたレスキュー隊が、丸ごと謎の失踪をするにあたって、僕の嘘の証言は真実味を帯び、事件

は“峠に生息する極めて大きな獣の仕業”という方向に急速に傾き、僕への疑いは一気に薄れていった。

なんでも近々、百人規模の山狩りが、警察と地元猟友会の主導で編成されるらしい。

ヒグマ等の猛獣を想定しているにしても、相当な規模のものだ。

陰陽人がいかに巨大で、怪力の持ち主だといっても、武装した百人のハンターを相手にしては、おそらくひとたまりもあるまい。

もし仮に、それを撃退するような事があれば、今度は、もっと大事になることも、あるだろう。

そうなれば、陰陽峠は、本当の意味での“最後”を迎えることになる。

夜。

歩を進める度、落ち葉の湿気を吸って、ジーンズはどんどん重くなっていく。

だが、それによって、歩みが遅れることはない。

周囲を照らすライトはない。

冬の装いの山は、葉のない木々も多いが、そのあまりの密度に月明かりさえ遮られ、辺りは完全な暗闇に沈んでいる。

しかし、視界を遮断するその闇も、少しも僕の進行を妨げはしない。

僕の目には、うねり延びる山道が、まるで日の光の下にみるように、はつきりと映し出されていた。

峠の入り口に張られた、太い金網と鉄柵でできた二重のバリケードは、市販のペンチと転がっていた鉄の棒で、簡単に通り抜けることができた。

素手でも可能だったかも知れないが、道具がある方が、当然容易だ。

ここは「陰陽峠」、古くからの言い伝えに残る、神隠しの山だ。

僕は再び　ここにいる。

しかしここには、以前のように僕を拒絶し、排除しようとする害意は、最早存在しない。

峠は、僕を受け容れてくれていた。

僕は、伝えなければいけない。

この峠に今、大きな危機が迫っている。

それはこの神域の崩壊を招く、許容されざる危機だ。

そしてその事態を招くきっかけを作ったのは、誰あるう、僕自身に他ならない。

僕は知らせなければならない。

僅かではあるが、同じ血を分けることになった“同胞”に。

あの事件以来、僕の体の中だけでなく心にある比重は、日に日に「陰陽人」へと重きを増しているように思える。

それが“生まれ変わり”であるのか“汚染”であるのか、はたまた“共生”であるのか、今は分からない。

僕は、会わなくてはならない。

僕の新たな血族に、新しい“母”に。

そしているのかも知れない、まだ見ぬ“彼ら”にも。

“母”は里に帰ろう、と言った。

ならば あるのだろう。

まずは、そこへ向かってみるつもりだ。

どこにあるかは分からない。

しかし、辿り着けるはずだ。

其処へ到る道は、こうして今ここに、こんなにもはっきりと見えているのだから。

導いてもくれている。

“母”の鼓動は、僕の耳に微かにだが、確実に届いている。

さあ、呼び声を上げよう。

応えてくれさえすれば、その居場所は知ることができる。

鼓動をはっきりと感じ取ることができるのだ。

僕は伸び上がって、肺一杯に空気を吸い込んだ。

峠の頂上から、暗黒の雲海の如き闇の奥へと届くように、ありつたけの声で呼びかける。

「！」

……陰陽人は、人の声に籠もりたる心臓の音に、居所を知るといへば……

『水無瀬市旧村落密集地帯C-6地区、通称“陰陽峠”における汚染調査の結果報告』

調査の結果、“混沌描写法”を用いた浄化の必要ありと認められる事象を、多数確認。

同地区の浄化は急務であると思われるが、現在“共通潜在意識界”と現界にて同時進行中の大規模共同作戦“49作戦”に大多数の実働部隊人員が参加中。“訪国中”の者も多く、作戦完了の目処も起たぬ状況であり、同地区の事態に即時対応する事は非常に困難であると判断する。

通常危機管理機構である警察及び水無瀬市自治体が、同地区において“山狩り”を行うという情報があるが、現状の当機関の態勢では、それらをサポートする事は、前記“49作戦”展開中であることから不可能であり、その場合“山狩り”実行時には相当数の人的被害を被るものと懸念される。

よって“山狩り”は期間再考の必要ありと結論するものである。その旨、各団体への働きかけは、外交部に一任されたし。

追加報告：本年8月に“深青学園高等部、同大学研究棟群含む第二新校舎”において発生した“学園生徒及び関係者大量変死事件”

の生存者1名が、意識不明の状態より回復。

現在療養中のため、事件詳細部解明のための事情聴取は後日、同生存者の回復を待つて行われる予定。

現状は混乱状態にあり、しきりに

「死んだはずの人間が起き上がり、友人を食べた」

「彼女」はどこにいった。「箱」はどこにいった」

などの発言を繰り返しており、事情聴取が可能になるまで時間が
必要である。

取り急ぎ伝えたい報告は一つ。

生存者救出時の担当官の一人が、その“箱”に関連する情報をも
っている証言。大量変死事件に、何等かの関係がある可能性が非
常に高い。

“箱”は目下捜索中であるが、発見後の対応は、非常に慎重を要
すると判断。発見後を想定し、隔絶度が高く、厳重保管できる場所
を現時点より確保する事を提案する。

尚、ごく私的な意見として付け加えると、その“箱”はおそらく・
・・・・
』

ある機関員の報告書より抜粋

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4598d/>

陰陽峠

2010年11月21日09時11分発行